

ペーター・ビクセルにおけることば遊びについて

— „Kindergeschichten“ のひとつの世界 —

日 野 安 昭

外 国 語 教 室

(1980年9月5日 受理)

Sprachspiel bei Peter Bichsel

— eine Welt seiner „Kindergeschichten“ —

Yasuaki HINO

Seminar der fremden Sprachen

(Received September 5, 1980)

Mit der genauen Untersuchung von Peter Bichsels Geschichte „Ein Tisch ist ein Tisch“, die in seinem dritten Buch „Kindergeschichten“ von 1969 enthalten ist, beabsichtigt der Verfasser des vorliegenden Aufsatzes, die Stellungnahme des Dichters zur Sprache und seine Auseinandersetzung mit dem verlorenen Verhältnis zwischen Sprache und Wirklichkeit deutlich zu machen.

In dieser Geschichte erzählt Peter Bichsel von einem alten Mann, der die Dinge anders benennt und dadurch eine Welt verändert. Dieser Mann, der bislang keine eigentliche Sprache für die Wirklichkeit hatte, kann jetzt eine neue Sprache haben, „die ihm ganz allein gehört“, indem er mit dem Wortspiel beginnt. Sein Sprachspiel führt ihn doch notwendigerweise zu keiner Verständigung mit den anderen und zu seiner Vereinsamung.

Der alte Mann stellt die Sprache, das Sicherste, in Frage und versucht, den Bestehenden Schwierigkeiten zu machen. Schon in seiner Kindheit mußte er das gleiche Kleid wie das der Erwachsenen tragen. Ein Kleid bedeutet und symbolisiert eine Welt; hier die Welt, in der die Erwachsenen leben. Von Kindheit an war er gezwungen, sich in die Welt der Erwachsenen, der in der Ordnung lebenden, zu stellen und konnte bisher gar keine Gelegenheit finden, die entscheidende Frage zu stellen, wer er eigentlich ist und sein soll. Nun befreit ihn doch das Wortspiel von dem Zwang der Anpassung an die bestehende Ordnung. Dies ist also sein Versuch des Gesprächs mit sich selbst und seine Bestrebung um die eigene verlorene Identität.

ペーター・ビクセルの三番目の作品 *Kindergeschichten* の世界の魅力のひとつは「ことば遊び」にある。とはいっても多彩な言語的操作がなされるわけではない。多種多様といわれることば遊びのなかでもごく単純なものである。たとえばここでとりあげようとする「テーブルはテーブル」Ein Tisch ist ein Tisch では物の名前の呼びかえだけである。しかしながら、ことばというものは社会のなかにあってもっとも確固としたものであるだけに、それが問題にされて揺さぶられるとき、遊びそのものがどんなに単純であっても、そこには重大な問題が含まれている。ことば遊びはときにその遊びの主体者の知識と

経験の全面的な組みかえを要求することがあるからだ。

本稿ではこの小品を仔細に検討して、ことばの遊びをとおしてビクセルが意図したところのことやビクセルのことばに対する姿勢を明らかにしたうえで、そこから浮かび出てくる現代の人間のおかれた状況をみてみたい。

ここで語られるのは「ことば」を失ったひとりの男の話である。年老いたこの男はひどく疲れている。「疲れすぎていて微笑むこともなく、疲れすぎていて腹をたてることもない。」(S. 21) 笑いや怒りも失い、感情をなくした疲れた表情を浮かべている。身を「灰色」一色で包み、灰色の帽子、灰色のズボン、灰色の上衣をつけ、冬

には灰色のマントをまとう。それは内面の孤独と鬱屈した心情を我々に示すかのようだ。老人の「首は細く、その皮膚はかさかさ乾き、シワだらけである。」(S.21) 彼を特徴づけるものは何もない。「彼を描写してみてもそれはせんないことだ。彼を他の人たちと区別しているものはほとんど何もない。」(S.21) 他の人々のなかに入ってしまったら、ほとんど見分けもつかないごくありふれた男である。

しかしこの男を決定的に特徴づけている点がある。それは「ものを言わない」ということだ。彼は「もはやひととも言も喋らない。」(S.21) 何かがもとで彼はことばを失う。だがことばを失うということは意思疎通の手段を失うということであり、外界との接触を失うということである。それは共同体の外に身をおく結果になる。

どうしてこの老人は孤独で自閉的な立場に立つようになったのか。この沈黙は強いられる沈黙なのか、それとも自ら選びとった沈黙なのか。ビクセルはこの沈黙にたったひとりの男の話を語り始める。

この老人のかつての生活は具体的には述べられていない。推測をもって語られるだけである。結婚もし、子供もいたらしいところから、ごく普通の市民生活を送っていたらしいことをうかがわせる。「この老人は朝散歩をし、午後また散歩をし、隣人と二言三言ことばを交わし、晩にはテーブルに向かって坐った。」(S.22) これが日課で、「日曜日とて例外ではなかった。」(S.22) 日のあるうちは散歩に時を費し、暗くなればテーブルに坐するという日々の過程のなかにどれほどの特別なことがあるといえるのだろうか。そこには変化など起こりようもない。一日一日がまるで定められた軌道を歩むかのようになり、同じことの繰返しである。昨日も一昨日も今日と同じ一日であり、明日も明後日もまた同じ一日が待ちうけている。毎日のひとつひとつが少しも変わることもなくそこにあり、繰返される。テーブルについた老人は「時計の時を刻む音を聞いていた。」(S.22) 時間とは時計の音にのせて追いやられ、消費されるべき性質のものである。心をとらえ、夢中にさせるものは何ひとつない。生きるということは時計に耳を傾けて時を消化していくことであり、ただ倦怠感をひきおこすだけのものである。そこにあるのは、ありふれた日常、繰返される日常の無為と倦怠のなかに浮遊しているだけの人生である。

そうした生活がある日を境にして一変する。その「特別な日」に大きな変化がこの男の身におこった。「この男は何もかもすべてのものが突然気に入った。」(S.23) 彼は微笑を浮かべる。「さあ、これからは何もかもすっかり変わるだろう。」(S.23) と考える。周囲にあるすべてのものが好ましく、五感にあふれるようにとびこんでくる。暑すぎず寒すぎない陽光、鳥のさえずり、親しげ

な人々、遊んでいる子供たち——それらが洪水のように彼の体内へ流れこんでくる。思わず微笑まずにはいられない。気分は晴れやかになり、「シャツの一番上のボタンをはずし、帽子を手に持ち、歩を早めた。」(S.23)。子供たちにはうなずいてみせ、足よりも軽く階段をかける。自分の部屋のドアを開けてみる。だが「部屋のなかは何もかも同じままだった。」(S.23) 当然部屋のなかも変わっていなければならないはずなのに、目の前にあるのはいつもと同じ部屋、変わらぬ現実である。たちまち喜びは消え、かわりに怒りがこみあがってくる。彼は拳をまとめてテーブルを叩いた。

世界は変わらなければならない。この男の内部で何かが起こり、何かが変わった。それにつれて世界も変わったはずなのである。少なくともこの老人にとって世界はもうひとつあるはずだ。何の変化も認められない「現実」を前にして、変容をうちに経験したこの男は、苛立たしさをおぼえながら、「変わらなければならない」と呪文を唱える。この呪文を唱えなければいられないのは、彼自身の内部で起こった変化が彼の人生、彼の存在のありようと深く結びついていることを、この男は感じとっているからだだろう。無為と倦怠の日々を過ごしてきたこの老人にとっていまや周囲は光彩にみち、生氣にみちる。そうした世界を垣間見、その存在を知ったものには、生氣のない凝んだ世界が再び自分を包むことに堪えられない。すべてが変わらなければならないのである。

この男はどうやって世界を変えようというのか。彼は物の名前を呼びかえるということでそれをかなえる。「『どうしてベットは絵と呼ばれていないのだ。』男はそう考えて微笑を浮かべ、それから声を出して笑った。——略——『今度こそ変わるぞ。』そう彼は叫んだ。彼はそれからベットを『絵』と呼んだ。」(S.25)

こうして彼の物の名称がえが始まる。周囲にあるものを次々に呼びかえていき、その作業に熱中する。「この男にはそれは楽しかった。彼は一日中それをしては新しい語を頭に刻みこんだ。いまやすべてのものが呼び名をかえられた。」(S.27) この名称がえは名詞だけにとどまらない。動詞もまた別の動詞におきかえられていく。老人は青いノートを買って求め、それに新しい語を書きつけていく。ノートいっぱい書きつけられた新しい語を覚えていき、かわりにもとの語を次々と忘れていく。

老人は物の名を呼びかえていきながら、現実の薄い皮膜を一枚また一枚と剝がしていった、その奥にひそむ未知の領域へと踏みこんでいくのである。

新たに獲得されたことばは彼だけのことばである。「自分だけのものである新しいことばを彼はいまや持った。」(S.28) 自分だけの新しいことばの獲得は、もうひとつの現実を創り出し、「現実」の世界をひっくり返

してしまう。新しいことばの創造によって彼は世界を変え、もとの世界からの脱出をはかり、成功する。

この老人をこうした「ことば遊び」に駆りたて、これほどまでに夢中にさせるのはなにか。またこのことば遊びによって老人が変えようとしたものはなんなのか。その理由をわれわれは彼の生きた「子供時代」に求めることができる。

彼が子供として生きた時代は「子供が大人と同じみなりをしていた時代だった。」(S. 22) 子供たちが大人と同じ服装をしていたということは、言い換えれば、大人の世界、大人の秩序のなかへ子どものうちから編入されたということである。なぜならば、「服装」や「衣服」はある世界や秩序を象徴するものだからである。彼らは子供だけの世界、子供だけに与えられるはずの経験の世界を奪いとられ、ついにそれを持つことを許されなかった。幼くしてすでにひとつの現実の秩序の枠組みのなかに生きることを、この男たちは強いられたのである。この男にとって「世界」とはすでにあるもの、与えられたものであり、大人たちが生きている世界なのだ。このすでにある、与えられた「現実」のなかに生きること、それこそが「生きる」ということの意味だった。市民としての生活、人生とはそうしたものだ。秩序を理解し、そのなかに生きること、共同体のなかでの市民権は保証されるのである。

市民権を保証されるかわりに、奪われた幼年時代は永久に失われたままである。この失われた幼年時代、そこにあるべきもうひとつの現実、それを取り戻そうとする試みこそがこの「ことば遊び」である。したがってこれは単なることばのうえだけの問題ではなく、ひとりの男の存在と密接かつ不可分に結びついたものだ。

ことばというものがある約束事のうえに成り立ち、語相互の間に関連性を生み出してひとつの秩序をつくりあげているのに、ある事物に別の呼称を与えるということは、その背後に、現にあることばの関連性というものが無視され、無効とされているということがなければならぬ。そうした前提のもとで、個々の語は孤立させられ、既存の意味が剥奪されるのである。事物の名称がえはしたがって、既成の関連性を排して、語と語の新たな組み合わせを行ない、新たな別の関連性を生み出していく作業にはかならない。それは新しい秩序を必然的に生み出し、既成の世界とは異なるもうひとつの世界を出現させることになる。

老人のこの「ことば遊び」はしかし、対象となる事物そのものを注意深く観察したり、ありのままに見ようとしたことからでてきたのではない。この遊びの出発点はむしろいまある語相互の結びつき、ことばの関連性を断ち切り、ことばの秩序を組み替えることにある。それは

彼の遊びがもともとすでにあることばを用いて、そのいわば「おきかえ」を行なっていることから言えよう。この「組み替え」によって現実世界の秩序を組み替え、もうひとつの世界・秩序を築こうとするのである。

老人のこのことば遊びによって日常の言語はその約束事を破壊され、意味の体系は解体されて語はそれぞれの意味から解き放たれる。そのとき既成の秩序は崩壊し、老人の手による新しい秩序が構成される。これまでの社会が指し示していた存在の方向とは別の方向がそれによって示されることになる。

これは現実の秩序に対する異議申し立てであり、否定であり、解体である。この男は子供のうちから身にまといわされた大人の世界、すなわち現実の秩序、日常性の原則を脱ぎ捨て、その世界に訣別を告げる。彼をこれまで縛りつけていたもろもろの軛から自らを解放して自分だけのことば、自分だけの世界をつくっていく。

それは彼自身の失われたアイデンティティの回復をめざす戦いとなるだろう。いまだ自分という存在への認識をもたない子供のうちから、強力な枠をはめられて共同体への適応を強いられたこの男が、自らのアイデンティティを求める行動に出たのである。奪いとられたアイデンティティを奪い返すために、「今こそ変わらなければならない」と呪文のように唱えながら、この男はいまいる世界からの脱出をはかる。その脱出はあの「ことば遊び」によって行なわれる。彼はひたすら秩序の組み替えに専念し、この孤独な作業のなかから自己の存在の方向を探り出そうとするのである。

ことばの主人になることで、彼は自分自身の主人になる。ことばを共同体の手から奪いとり、自ら事物に命名することによって自分の世界を創造していく。与えられた生ではなく、他のだれのものでもない自分だけの人生を自分の手で築こうとするのである。

この老人のこのことば遊びは間をもって始まった。どうしてテーブルはテーブルと呼ばれ、ベットはベットと呼ばれるのか。どうしてベットは絵と呼ばれないのか。つまりこの男は「きまりきったこと」とされていることに間を發する。それはとりもなおさず、「きまりきったこと」の背後にひそむ矛盾や不合理や欺瞞に対する批判・抗議へとつながる。ビクセルは、ことばによって体现されるひとつの世界、きまりきった世界、すでにある秩序にうさんくさいものをかきとり、疑義を表明する。おのれの存在についても、おのれのおかれている状況についても思いをめぐらすことがまったくできないか、できても不十分なものでしかない年齢のうちから、人々を撈めとり、編入を強要する共同体というもの、いま目の前にある「現実」というものを、ことばの面から攪乱し、そこに支配する論理の桎梏から精神を解放しようとするのだ。

そして現実の秩序を解体したうえで、「現実」そのものを消滅させようとする。老人のノートに記されている無数のことばは、彼によって集められた現実の破片であり、残骸である。

子供のときにすでに封じこまれてしまった「自分は何ものなのか」という問は、老人をことば遊びへと促し、現実の世界の呪縛から彼を解放し、「自分のことば」の獲得にむかわせる。強いられたいはいえ、「答」のなかに生きてきたこれまでの人生にあって、老人が発したあの問は、奪われたアイデンティティの回復をめざす戦いを告げるものとなった。その日以来、この男は「問の世界」に落ちこみ、その世界に生きることになった。

大人の世界は答の世界だ、とビクセルは言う。「ひ」としたら大人であるということは、問うこともなく答のなかに生きること、問わずして答をもっていることを意味している。¹⁾「子供は問のなかで生きることができ、大人は答のなかに生きる。」²⁾老人は大人の世界に生き、答の世界に生きてきた。この男を、ビクセルはあの問をもって、「問の世界」へ移す。ことば遊びのために、日常の社会の原則や有用性は転倒され、倒置される。同時にそれは、大人の論理＝秩序の有効性を疑わせ、その唯一絶対性を揺さぶる。一見うごかしがたくみえる論理も、普遍妥当と思える論理も、容易にその正当性を覆しうる性質のものであることが示される。

ことばからそのもつ個々の意味を剥ぎとるというのは、反社会的な行為である。なぜならば、「《意味》」の認識はすでに社会的行為なのである。こうして人間は《意味》という深さ・厚味を与えられた共同体的世界の中で生きており、またこのような《意味》による深さの中で生きることが、ふつう《人間的》とか《常識》とか《正気》とか呼ばれていることの実体であるわけだ。³⁾老人のことば遊びは、「常識」とか「人間的」とか一般に呼ばれているものへの異議申し立てであり、否定であり、攻撃であるという面をもつ。いわば秩序への叛意を意味するものである。日常の社会で通用していることばは、問を奪われた御仕着せの答の世界のことばである。

「ことば」と「もの」との間のこうした歪んだ関係は、たとえば同じ作品集に収められている「アメリカなんてありゃしない」Amerika gibt es nicht という物語のなかでも語られている。コロランが発見したとされる「アメリカ」なる国について、人々の口から語られることはまったく同じもので、新しい土地「アメリカ」もたちまちひとつの特定の意味にみたされる。「ともかくだれもかれも同じことを語り、だれもかれもが旅行に発つ前からとうに知っていたことを語っている。」⁴⁾この「アメリカ」に象徴されるように、「事物」はそれを見聞し、経験し、五感をととして触れられ感得される前から、す

でにひとつの答を与えられている。一個の人間も、「大人と同じ服」を着せられる。自分の存在に関しても、問う前に答があり、その与えられた答を身につける。自分自身に関わる根源的な問ですら、ひとがその間に直面する前に、すでにその答を与えられているのである。秩序という大人の服は、その答を先まわりして与え、問そのものを封じこめてしまうのである。

ビクセルはこうも言う。「秩序というものを理解するということは、答のなかに生きるということの意味する。」⁵⁾つまり答のなかに生きるということは「秩序」を理解することだ、というのである。だから秩序に生きる大人にとっては、たとえば「戦争はなぜあるのか」ではなくて、「戦争はあるのだ」し、「なぜわたしたちには軍隊が必要なのか」ではなくて、「わたしたちは軍隊が必要なのだ」である。こうビクセルは言って、こうした問を発する者（＝子供）は秩序というものがのみこめていない者であり、「既存の答の敵対者」⁶⁾であるという。

ことば遊びは秩序の攪乱をもたらす反社会的な遊びであり、アウトサイダーの遊びである。あの「特別の日」を境にして、老人は「現実の世界」からこぼれ落ちた。そのアウトサイダーとなった彼が試みたことは、「自己との対話」だった。ことばが伝達の具として機能しないことが分かると、老人は沈黙する。そうして「自分自身とだけ話をした。」(S.31) この対話をとおして、彼は自分という人間に向きあい、自己の存在についての根源的な問に直面し、この問に取組むことが可能になる。自分自身と対話するとき、ことばは自分のことばでなければならなかった。新たに見出したこの問には、既成の答はない。しかしこの問を避けることはできない。沈黙のなかに引っこんだいま、この問から逃れることもできない。これは「人間」が自ら引き受けるべき問である。自己との対話は、この老人を社会的な類型としての人間から「ひとりの人間」に変えるだろう。

ことばと意味との結びつきは論理的な必然によるのではなく、社会的な約束事によって恣意的に結ばれている⁷⁾のであれば、両者の結合をほどいて別の結びつきも可能であることが示されたとき、両者を結びつけている「社会的な約束事」の「恣意性」は露呈され、ときにはその欺瞞性も暴かれよう。老人のことば遊びは、ことばと意味とを結びつけている「約束」とそれを裏づける「論理」のいかがわしさを明らかにする。これは単なることばの領域を超えて、そうしたことばの流通する「社会」に対しても根源的な疑義の提示となり、告発・否定となる。ビクセルがこの小品をととして指摘していることは、ことば自体のいかがわしさもさることながら⁸⁾、むしろことば（音声や文字）とそのことばの指示する対象とを結

びつづけている社会的な約束事＝現実社会の論理の欺瞞性と恣意性であり、その約束事への盲目的な隷属を強要する既成社会の構造である。この既成の秩序に対してビクセルは拒否の態度を示す。彼は「秩序」を告発し、否定する。

ビクセルは「大人にならないことを決意した」⁹⁾というが、それは「大人になれば分かる」といつづけて、「分別」なるものを要求し、「秩序」を理解することを要求する大人たちへの訣別の弁であるとともに、大人の「秩序」、大人の「世界」に対する公然たる否定と反抗の弁でもある。この小品において繰り広げられる老人のことば遊びは、こうしたビクセルの姿勢を反映した、既成の秩序を攪乱する試みであり、ことばを共同体の手から自分たちの手にとりもどす試みである。

老人が獲得したことばはしかし、彼が身をおいていた共同体（社会）では通用しない。他の人々が言っていることが老人には分からないし、老人の言うことは他の人々には分からない。ここではことばが話者の意思を伝達するという機能をまったく持ちあわせていないのである。人々の言うことが理解できないということはしかしながら、たいしたことではない。「まがいものことば」が通じなくともそう「困ったことではない」。だが、「ほんとうのことば」が伝わらないということは不合理なことである。だから、ビクセルは、このことの方が「ずっと困ったことだ」し、この話は「悲しい話」である、というのだ。(S. 30—31)

老人はことば遊びに深入りすればするほど、ますます四囲の世界の堅固さと強大さを思い知らされる。老人が引き受けた戦いはつらい、孤独な戦いである。孤立無援の戦いである。そのうえ彼が相手にまわした世界は圧倒的に強大である。その強大な敵に彼は徒手空拳をもって挑まなければならない。世界はその強大な力をもって老人に沈黙を強いる。沈黙は同時に孤独を強いる。だがこの強いられた沈黙も、強いられた孤独もつまるところは、老人自身が選りとった沈黙であり、孤独である。

「孤独」を積極的に背負いこまないかぎり、彼は「もうひとつの世界」に生きることはできないだろう。こうした孤独に身をおき、自己との対話を重ねていくことを決意したものだけが、自分のことばを見出し、獲得する

ことができるのである。立ちどまって、大人にならない決意を表明するビクセルもまた、こうした孤独な戦いを戦うことを決意した人間であろう。孤独を運命として積極的に身に引き受けることを決意した人間であろう。こうした孤独は、だれもが引き受けられるものではあるまい。それをできるのは、やはり選ばれた者だけである。この老人のようなそうした選ばれたものの行動は決して華々しいものではないが、それでもやはり英雄的な行為だ。真の人間的な偉大さとは、むしろこうした孤独な営為のなかにこそあるといえよう。

テ ク ス ト

Peter Bichsel: Kindergeschichten. Darmstadt und Neuwied, Hermann Luchterhand Verlag 1973

(文中の数字は本書のページ数を示す)

参 考 文 献

Bichsel, P.: Geschichten zur falschen Zeit. Darmstadt und Neuwied, Hermann Luchterhand Verlag 1979

Bichsel, P.: Stockwerke. Stuttgart, Reclam 1974

Noble, C.A.M.: Sprachskepsis über Dichtung der Moderne. München, edition text+kritik 1978

高橋康也 ノンセンス大全 晶文社 1977

高橋康也編 言語遊戯 日本ブリタニカ 1979

註

- 1) Bichsel, P.: Geschichten zur falschen Zeit. S. 33.
- 2) Ebd., S. 34.
- 3) 高橋康也, 『ノンセンス大全』95ページ
- 4) Bichsel: Kindergeschichten. S. 49—50.
- 5) Bichsel: Geschichten zur falschen Zeit. S. 34.
- 6) Ebd., S. 33.
- 7) 高橋康也, 上掲書, 56ページ参照
- 8) „Amerika gibt es nicht“ でのアナグラムはこの点に関わる問題といえよう。
- 9) Bichsel: Geschichten zur falschen Zeit. S. 31.